鶯丸という現象

～資料から読み解く鶯丸の姿～

セキレイ@WagtailW

令和元年五月二十六日 A4 横書版公開
令和二年五月二十六日 A5 縦書に改訂

明治40年に明治天皇に献上された鶯丸は、献上前にその刀身にあったフクレを修復されたという記録がある。そこからの連想で、か、疵により価値のなくなった鶯丸が名研師により復活したということがまことしやかにネット上で語られることもある。しかし、明治時代献上前における鶯丸の評価は現在と同様総じて高く、古備前の名工友成の傑作と称されている。この齟齬は、エモーショナルな話題のほうがより広まりやすいことに起因し、周知されている情報が偏っているからなのではないかと思われる。鶯丸の評価およびフクレに関する資料を収集し、それらから読み解いた鶯丸という刀は、千年ずっと美しく修復でより完璧になったとのだと私は推察した。フクレがいつから表面に現れたものかわからないが、それは「美人にできた小さなにきび」程度のものだったのではないだろうか。

目次

1 はじめに 2
2 鶯丸略歴 2
3 小笠原家宝刀としての鶯丸 3
3・1 第六代将軍足利義教感状 3
3・2 小笠原の記録 4
3・3 吉宗台覧の記録 8
3・4 室町、江戸の評価まとめ 9
4 献上前の評価 10
4・1 明治21年11月遊就館展示に際し 10
4・2 明治32年2月今村長賀友成真作と評す 10
4・3 明治32年宗重正鶯丸を遂に入手す 11
4・4 明治38年3月以前別役成義鶯丸を賞す 12
4・5 明治39年田中光顕鶯丸入手する 12
4・6 献上前評価まとめ 12
5 田中光顕の刀剣に対するスタンス 13
5・1 明治39年光顕「名刀」を得る 13
5・2 光顕持論『名刀とは元帥の差料たる刀剣』 14
6 献上後の評価 15
6・1 昭和初頭の鶯丸鑑識書 15
6・2 平成において小笠原信夫鶯丸を賞す 15
6・3 献上後の評価まとめ 15

7 フクレについて **16**
7・1 刀剣のフクレにたいする評価 16
7・2 フクレ(blister)のメカニズム 18
7・3 鶯丸とふくれ 19
7・4 高田庄左衛門について 20
8 まとめ **20**

1 はじめに

巷で語られる鶯丸という物語に『エモ』さを感じる要因のひとつとして、長い間貧乏藩主が所持し『ふくれ』によりその刀剣としての価値を無くしていたところを、名研師により修復され、天皇に献上されることとなったという、いわゆるシンデレラストーリー的で一発逆転サクセスストーリーという側面があるのではないだろうか。私も鶯丸沼に入りかけ、ネットの情報を拾い読みしていた頃はそう思っていた。

しかしながら、実際鶯丸の資料を集め精査すると、小笠原家がいかに鶯丸を特別なものとしてきたかや、明治以降の所有者が想像以上に刀剣に造詣が深い人物でありその彼らが鶯丸を強く求めたという事実、また明治の刀剣界の重鎮からの高い評価を鑑みるに、鶯丸はずっと美しい刀であったのではないかという思いを強くした。

また、「鶯丸に献上前ふくれがあり修復された」という話が残されているのは事実であるが、刀剣としての価値を損なうほど身を崩していたというイメージは、『ふくれ＝刀剣の疵』からの連想がSNS等で一人歩きしたものであろう。そのようなイメージの定着は、『献上前の鶯丸の高い評価』はあまり『エモ』ではないため、広まりにくいからであろうか。

本稿では鶯丸の刀身の評価に関する資料を包括的に示す。ここから各人の解釈の参考としていただきたい。

2 鶯丸略歴

鶯丸が明治時代、明治天皇に献上され現在まで御物であることは周知の事であるが、本稿の理解の一助に献上されるまでの略歴をここに記す。

まず、鶯丸の記録は嘉吉元年5月26日に書かれた感状が現在認められている最古であろう。この感状は永享十二年から嘉吉元年(1440–1441)に下総国結城(現茨城県結城市)にて起った結城合戦の戦功の褒賞として、六代将軍足利義教から信濃守護小笠原政康に与えられた友成の太刀に添えられたもので、義教の花押入りの御内書として書かれている。そこには、鶯太刀 友成 と書かれている[1]。この感状は六百年近い年を経た現在も鶯丸本体と共に在る[2]。

小笠原家は政康の死後家督争いで分裂するが、政康の息子光康を祖とする家系が鶯丸を最終的に受け継ぎ、[1] 江戸時代には大名となり、受け継がれた経路には諸説ある。しかし、最終的には勝山藩主家に鶯丸は伝わっている。

[1] 小笠原家の惣領職と共に相続される重代の文書、太刀類も争いの種となって

なり幾度かの転封の末、越前勝山藩主（福井県勝山市）となり明治維新を迎える。ちなみに、博多藤四郎、豊前江、秋田藤四郎、不動行光を所持していた豊前小倉藩主（福岡県北九州市）の小笠原家は政康の甥を祖とする家系である（図1参照）。

明治維新後、小笠原家における鶯丸の最後の記録は明治22年における遊就館における一般公開であろう[3]。その後、明治26年に小笠原長育により装丁された小笠原家文書目録に鶯丸の感状が含まれていないことから[4][5]、明治22年11月から26年5月の間に小笠原家から感状と共に売却されたと考えられる。其の後、てんてんとした後明治32年頃に宗重正が入手し[6]、明治39年頃に田中光顕が重正の息子重望から購入している[7][8]。そして、明治40年11月に茨城県結城において陸軍大演習が行われた折、結城に縁があるとして当時宮内大臣で大演習にも随行していた田中光顕より明治天皇に献上され[2]、現在に至る。明治以降の来歴の諸説は[9]を参照のこと。[2]

3　小笠原家宝刀としての鶯丸

嘉吉元年（1441）結城合戦戦功の褒賞として鶯丸（鶯太刀）が小笠原家に下賜されて明治中頃（1890頃）に売却されるまでのおよそ四百五十年の間、鶯丸は小笠原家の第一の宝刀、いやさ、第一の至宝であった。

[2] 昭和以降の資料で鶯丸が宗家から山本達雄もしくは秋元子爵に渡ったという説も見られるが、宗重望→田中光顕は、確実な資料（当の御本人談[7] or リアルタイムに近い情報[8]）があるためこれが正しいと考えられる。

小笠原家における鶯丸の価値は、『美しき名刀』であるかどうかではないので、本稿のテーマである、刀身の美しさの評価という点においては本章は冗長かもしれないが、鶯丸の評価という点において小笠原家における在り方は外すことができないので記す。（この章は個人的な趣味により長くなりました。）

信濃における小笠原家の歴史に関しては、[10][11][12]を主に参照している。

3・1　第六代将軍足利義教感状

まず、結城合戦終結の後、嘉吉元年（1441）5月26日将軍足利義教より戦功のあった小笠原政康に鶯丸が下賜されたとき添えられていた感状は以下の通りである。

「勝山小笠原文書」[1]ヨリ

今度結城館事即時攻落凶徒等
悉討捕剰虜春王丸安王丸畢
武略無比類尤感思食候仍
鶯太刀 友成 一腰遣之候也
五月廿六日　（義教花押）
小笠原大膳大夫入道殿

結城合戦は永享十一年（1439）に幕府勢が自害においこんだ関東公方足利持氏の遺児春王丸、安王丸を永享十二年に持氏の残党らが擁立して挙兵。幕府方が小笠原政康ら諸将を派遣し結城氏朝ら

が立て籠る結城城を一年にわたる攻城戦の末に落城させたものである。

この感状は小笠原政康に対し、城から逃げる二子を捕えたことと、その無比なる武略を評している。この文面だけを見ると、政康の戦功は二子を捕えた事に焦点があたりがちであるが、政康はこの戦において関東という他所の庭に信濃勢三千騎を率いて参陣し、副将を仰せつかり陣中奉行として活躍したという大功がある。

さて、この感状には鶯太刀友成と記載されていることに注目したい。

まず、鶯太刀という表記だが、「鶯太刀」が元来の号であったかどうか？ は判然としない。号持ちの太刀を表現するとき、太刀号××と書かれるのが一般的に思えるからだ。室町時代に書かれた史料はあまり多くに目を通していないが、義教の時代には「足利家御重代太刀（号サ、作）御重代御鎧（号御小袖）（太刀号ササ作、鎧号御小袖）などと記述されている[13]。鶯丸も、江戸時代に書かれた史料では『号鶯太刀』と書かれ鶯太刀が号であることが明記されるようになる。（他に、号鶯、号鶯丸の表現も見られる[15]。）これに関しては、まだ私の知識も浅いので広く史料を比較してみないといけない。ちなみに鶯の名の由来を示す史料は、小笠原家に残されていないようである。

次に刀工名が記載されていることに関してだが、義教までの時代で、褒賞として与えられる太刀の刀工名が感状に記載されているパターンはほとんど見ない。（すくなくとも、後鑑[16][3]に記載されている範囲内では。）義教の子の義政の時代になって、刀工名が記載されるようになっている。小笠原政康も、鶯丸以外にも戦功で幾振もの太刀が与えられていたが[4]、感状には「太刀一腰」としか書かれていない[5]。また、政康の嫡男宗康を含め幾人かに結城合戦褒賞として太刀を与えた感状の内容が残っているが[16]、政康に与えた感状にある「鶯太刀友成一腰」以外は、すべからく「太刀一腰」である。ちなみに、宗康に与えられた太刀は「兼光」であることが小笠原家の家譜[17]に書かれている。

このように、義教の時代において感状で「鶯太刀友成」という表現がなされることは非常に稀有なものである。このことが即ち鶯丸が稀有なる名刀であったということを示すわけではないが、この鶯丸の下賜は義教にとって特別なものであったのではないだろうか。

詳細は省略するが、義教にとって結城合戦は籤引きによる将軍就任の時から宿縁の敵であった関東公方家を一掃する総決算の戦であった。

3・2　小笠原の記録

小笠原家にとって鶯丸はどんな存在だったのか？

3 室町幕府十五代の歴史書。江戸時代に江戸幕府により編纂された。

4 鶯丸の友成、久國、真長、来國光、真宗の太刀が足利義教から小笠原政康に感状とともに下賜されたことが家譜に記載されている。

5 正確に記すと、政康が義教に正月祝いとして太刀を献上した返礼品に義教より贈られている刀に関して、文書に「刀一腰殊に刀銘は國泰、目出思食され候の間、これを遣はし候なり」[1] と書かれているものが一通だけある。

中世武家において惣領職とは、所領を中心に家伝の文書、太刀、鎧等の惣領職を象徴する物品により顕現するという考え方があった[14]。小笠原家の家伝の重宝である足利将軍より賜った感状を始めとする文書、鶯丸はその惣領職を象徴する物品の際たるものだったのであろう。ラテン語でレガリア(regalia)という単語がある。その意味は、それを持つことによって正当な王、君主であると認めさせる象徴となる物品(wikiより)とある。日本で言えば、天皇家の三種の神器がそれである。鶯丸はまさに小笠原の『レガリア』なのだ。(伝家の宝刀というと、衆議院解散しそうなイメージが先行してしまうし、三種の神器も一般名詞化しているので、以降この象徴物品のことを『レガリア』と表記する。)

詳細はここでは省略するが、勝山藩主となった小笠原の系統(信濃の松尾=長野県飯田市を拠点としていたので松尾小笠原と呼ばれる)は、現在の歴史においては、1534年に府中小笠原(府中=長野県松本市、後の小倉藩主家)に攻め込まれ甲斐に敗走したことで家督争いに敗れた側と解釈されている。一方、府中家は分裂していた小笠原を統一し、小笠原の惣領職となったというのが一般的な認識となっている。

しかし、松尾小笠原家は小笠原の正当な惣領職であるという自負を持っていた。松尾小笠原に残った文書類と鶯丸は、そのよすがであったのだろう。

徳川第三代将軍家光の時代、小笠原では貞信の代に諸大名の家譜の編纂(寛永諸家家系図伝)を幕府が行っている。小笠原(当時は美濃高須藩主・岐阜県海津市)よりは、足利将軍より賜りし文書や武功の褒賞として与えられた太刀や感状について書かれた家譜が提出されている。その折の寛永19年(1642)、大橋長左衛門(家光の右筆=書記)から「足利将軍からの本領相続の証文や、武勇忠功の感状と太刀を悉く持っている。他にも家系図には載せきれないものが数十通。すなわち、小笠原の祖長清から貞信に至る二十一世小笠原家惣領職を相続するものなり」という内容の文を貰ったことを後の家譜[30]に載せている。このように惣領職であるということの証として、相続を示す証文(譲状)だけでなく、武功を示す感状や太刀が重要であることを示している。以下、内容を一部抜粋する。

「勝山小笠原家譜」[30]より

貞信の項

大橋長左衛門其文曰

(略)本領相続之証文武勇忠功之感書並太刀等悉有貞信家今此系図所載之外有数十通以繁多之故尽載之然則自元祖長清至貞信二十一世相続小笠原之惣領職者也

寛永十九年壬午夏五月日

源朝臣小笠原主膳

貞信

一方で、その翌年の寛永20年に完成した幕府編纂の寛永諸家系図伝[19]には、上記の内容と共に府中=小倉小笠原も惣領職であると言い伝わっているということが併記されているので実際に幕府より"惣領職"のお墨付きが出ていたのかどうかは疑問が残る(ここに関してはまだ調査不足である)。どのみち、家禄は雲泥の差

（勝山藩二万三千石弱、小倉藩十五万石）なのだ。

勝山小笠原家に伝わる武功の太刀は、鶯丸以外にも何振りか家譜に記載されているが、鶯丸、久國、真長の三振りの太刀は特別だったようである。

信胤の頃にまとめられたと思われる「松尾小笠原の大略」では、小笠原家が松尾城主として繁栄するにいたる由来を記したものであるが、その中で、元祖の長清公からの御影（肖像画）が松尾家に全て残っていること、足利将軍代々から賜った様々なもので多く紛失したものもあるが鶯丸、久國、真長の三振りの太刀が残っていることが強調されている。（将軍から賜った数々の品は多く紛失したけれど、鶯丸、久國、真長とその感状が残っていることは家中で当然ご存知でしょうから、ここにわざわざ書き留めておく必要もないことかもしれませんが・・・という内容）久國、真長の太刀は、鶯丸より5年前の永享8年に信濃国内におけるそれぞれの戦功により義教から下賜されている。以降、四百五十年ズッ友である。[6]

「松尾小笠原の大略」[20] ヨリ

小笠原家の元祖長清公より、当時信胤公まで二十四世なり、忽して御先祖加賀美次郎遠光公の御影（金岡ノ筆ト申伝也）より以来御影像御一代も欠す画して、今に松尾の小笠原家に御伝へ候儀、並二将軍家代々の感状是又添てつかわされ候御太刀腹巻等品々のうち、今感状並二直筆之御書などばかり相残て添えられし品もの多紛失の中に、鶯の友成の御太刀、久國の御太刀、真長[7]の御太刀御感状に添へて御座有御事等ハ勿論御家中にていづれも御存知之事二候得ば、爰に書留申に不及候得共、如斯

勝山小笠原家に伝わったその三振の中でもことさらに鶯丸は別格の存在であった。「菱実紀聞」[21]は幕末小笠原家の侍医であった西門蘭渓が小笠原家に関する記録を蒐集し、編集したもの[22]であるが、その中で、鶯丸は小笠原家「第一の至宝」と記している。

また、小笠原家は鶯丸が下賜された結城合戦にまつわる3月15日を祭祀の日とし、転封のたびに八幡宮を遷宮し、毎年絶えず八幡宮で例祭を行っていた[17]。この祭りに関するまとめと考察は[23]にあるので参照されたい。

話は逸れるが、小倉小笠原には「鶯丸の影」とも呼ぶべき存在の太刀がある。少し説明が長くなるが、あげておく。

小倉小笠原家は家系図において政康の嫡流を主張している。しかし現在の定説においてはそれは誤りで、政康の甥（政康の兄長将の子）を祖とするとされている。政康は信濃において失墜していた小笠原の信濃守護としての立場を回復し、ごたついていた信濃を武功により平定した人物である。小倉小笠原に繋がる府中家は、その英傑である政康の嫡流を標榜するのであるが、[8]先述の通

6 明治21か22年に鶯丸と共に他三振が一般公開されている。そのうち一振は久國であることが書かれているが、残りは明記されていないがおそらく真長の太刀であろう。この四振りは鶯丸と共に売却された[6]。

7 参照にした松尾小笠原の大略[20]では、真長でなく実長と書かれている。しかし、他史料との比較から実長ではなく、真長であることがわかるので、ここでは真長と表記した。

8 こういった嫡流を正当化する家系図の改竄は、後世に残った家系の家譜では

りレガリアとなるべき政康に戦功の褒賞として与えられた太刀と感状はことごとく松尾家に伝来している。政康の武功の中においても結城合戦は総決算ともいえるもので信濃三千騎を率いて下総に参陣している。惣領職たらしめる象徴のレガリアとして、結城合戦の褒賞の太刀は外せなかったのか、小倉小笠原家の家譜において、この時の褒賞の太刀を「守家太刀」であると記載し伝えた[24][25][26]。この守家太刀は、無銘であると小倉小笠原家の御当家末書[28]には書かれている。家督争いで敗走した松尾小笠原であるが、なんとか命脈を繋げ江戸時代には大名として残ることができたが、もし、戦乱の中鶯丸と感状が失われていたらこの「守家太刀」が、結城合戦の褒賞であることが正史であると伝わってしまっていたかもしれない。歴史とは、残ることができたモノの組み立てでしかないのだ。

また、小倉小笠原家には『鶯』と呼ばれる太刀が伝わっている。これは、「笠系大成」[24]によれば鶯丸が小笠原に入った時代より百年ほど遡る南北朝時代に、当時の惣領職である小笠原政長が禁中において逃げた鶯を弓矢でもって傷つけずにとらえたことから賜った太刀であると伝えられていて、「景」の一字が残る摺上[10]の太刀と書かれている[28]。しかし、「笠系大成」のベースとなっている江戸時代頭にまとめられた府中小笠原家の記録「溝口家記」[29]には、鶯をとらえたことは記述されているが『鶯』という太刀を賜ったことはおろか、太刀を賜ったことさえ書かれてはいない。小倉小笠原側の寛永諸家系図伝[18]、寛政重修家譜[25]も同様である。この南北朝時代の記録に関しては信憑性は定かでないが、この『鶯の太刀』もまた、レガリアとしての役割を務めており天正17年(1579)に府中家が流浪先で家督と共に『鶯』を父子で相続したとの記録が各家譜に残る。そもそも、政康の時代に鶯の名を持つ太刀が二振あり、分裂した小笠原にそれぞれに伝わるという偶然があるものだろうか？　ここは全くの個人的感想なのだが、この『鶯』もまた政康の死後の小笠原が分裂し争っていた時代に生まれた鶯丸の影に思えてならない。

さて、現在まで残る名刀には折紙などで値がつけられ、相対的な価値が示されているものも多いが鶯丸にはそのようなものは残っていない。伝家の宝刀は贈答の対象とされることはないため値打ちを付ける必要はないからであろう。また、鶯丸が下賜されたのは刀剣の目利きを生業とした本阿弥家が台頭する以前で、織豊時代はおろか、応仁の乱よりも前で折紙という概念すらない頃である。(その頃の刀剣に添えられる折紙というのは、目録のようなものを意味する。)

---

9 小倉小笠原の家譜であるが、史実を元に編纂した家譜というよりは家伝の言い伝えがじゃんじゃか入っている。

10 南北朝の頃に太刀の摺上は行っていないと思われる。嘉吉二年(1442)の摺上銘が入る太刀が存在するが、それが摺上の最も古い頃と言われている[31]。禁中でもらったお家の宝刀を後世に摺上るものですかね？　と思う。(ひとりごと)

よく見られる。

3・3　吉宗台覧の記録

鶯丸は小笠原信胤が当主の時、徳川吉宗に台覧され御褒詞を賜ったという記録が残っている。一方で、吉宗の時代に編纂され多くの名刀がリストされている所謂「享保名物帳」には鶯丸は記載されていない。鶯丸は「名物」[11]ではないのか・・・と残念に思ったことはないだろうか？

名物帳の完成は、享保4年とされるが鶯丸の台覧はそれから17年後の天文元年である。また、台覧の前年享保20年に幕府から「小笠原の家譜に記載されている、足利将軍からの感状とか太刀とかってまだ存在しているの？」という内容の問い合わせが来ていることから、鶯丸の存在自体小笠原家の外には広く知られていなかったのかもしれない。また、最近の研究によると吉宗が本阿弥に命じて諸家の刀剣を広く調査させて名物帳を編纂したということはなく、吉宗の新たな武具作成のための諸家の武具を調査するためのネタ元として、その時点で本阿弥家が持って居た情報を使ったのではないかということが指摘されている[32]。鶯丸は「名物」の選から漏れたわけではなく、本阿弥家がその存在を知らなかっただけなのであろう。

小笠原家に上意として伝えられたお問い合わせは以下の通りである。直の意味からすると、まだ持って居ますか？　だが、ちょっと見せて、の意味が含まれているのであろう。

「森文書御用留」[33]ヨリ

享保二十年十月十八日
上意御書付左之通
小笠原主膳貞信系ツ之内、尊氏以来足利家之カン状証文等数通、並重代之太刀之事有之テ今所持歟

この上意の後、信胤は家臣にこの事案を担当することを命じている。翌年の元文元年9月に、鶯丸は久國、真長の太刀と義教からの感状三通とともに吉宗に台覧され、お褒めの言葉を頂いている。

勝山小笠原家譜[30]より
信胤の項
元文元丙辰年
九月十三日有欽命家系之儀御尋之砌政康自義教将軍所賜之感状三通並久國真長友成之太刀等備上覧有賞誉之命

寛政重修家譜第百九十五[34]
元文元年九月十三日おほせによりて普廣院義教の感状、をよび久國眞長の太刀、ならびに友成作の鶯の太刀等を台覧に備えふ。

「有徳院殿御實紀附録巻七（徳川実紀）」[35]より
小笠原左衛門佐信胤よりは。足利将軍義教のとき下されし 御教書及び感状に。久國眞長の太刀（鶯と銘す。）を御覧に呈し 御褒詞を蒙る。

11 定義として名物というのは享保名物帳に記載されているもをさす

この鶯丸の台覧は吉宗が行っていた古の武具等を広く調査していた事業の一環で「有徳院殿御實紀附録巻七」[35]には諸家から台覧された武具のリストが記載されている。その中で「誰々に何々を見せてもらった」というだけの場合と「誰々に何々を見せてもらって御感の御詞をくださる」や「誰々に何々を見せてもらって御褒詞を蒙る」の表現がある。鶯丸は"御褒詞を蒙る"のパターンである。このお褒めの言葉は形式的なものなのかもしれないが、鶯丸の台覧は褒められているほうとも考えられなくもない。ただし、鶯丸の名刀っぷりを褒めているのか、足利将軍時代の感状と太刀を大切に残していることなのかはわからない。

3・4　室町、江戸の評価まとめ

室町時代や江戸時代の史料において、本稿のテーマである鶯丸の名刀としての評価に関してはわからない。しかし、義教からの感状に当時としては非常に珍しく刀工名が明記されていることや鶯太刀という表現、小笠原家第一の至宝という表現、吉宗台覧で「御褒詞を蒙る」という表現が使われていることなど、多少のひいき目は入ってしまうが、特別な太刀であったことは間違いない。

何より小笠原家にとって鶯丸は『レガリア』なのである。『影』の存在を作ってしまうほどに。

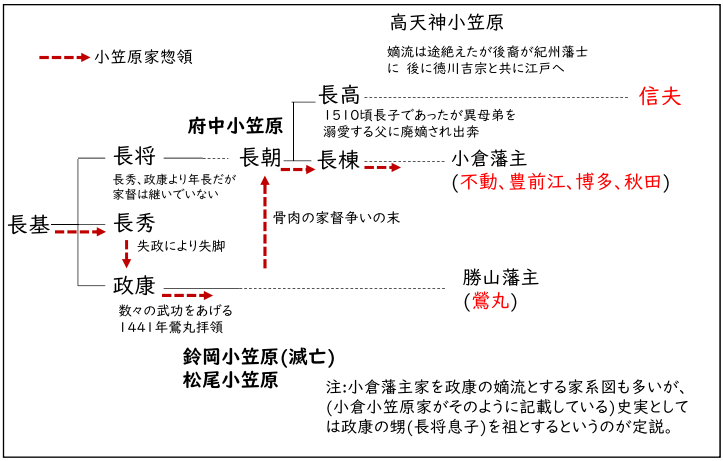

図1：小笠原家家系図簡略図。煩雑なのでここでは省略しているが、政康死後、政康嫡男宗康と長将嫡男持長による家督争いが勃発し宗康が討死。其の後、宗康弟光康の系統（松尾）、宗康息子の系統（鈴岡）、持長の系統（府中）に分裂。其の後の小笠原家内訌は非常に煩雑なので省略するが、松尾が甲斐に敗走し、府中家が小笠原を統一したことになっている。結局府中家も武田に信濃を追われることになる。府中から分派した高天神系はその後裔が、鶯丸を平成の時代東京国立博物館に展示した。

4　献上前の評価

明治時代に入ると刀剣に対する価値観は大いに変化する。明治9年の廃刀令により、武士の象徴としての役割がなくなり、秘匿されていた家伝の宝刀も衆人に公開される機会も増え、お家の没落による売却の際には値が付けられ、愛刀家による蒐集の対象となった。

その中で、鶯丸は刀剣界の重鎮らに「友成で最も見事な出来」や「友成の最も確かなる一振」と称賛され、鑑刀眼確かなる愛刀家達に強く求められたりと、高い評価を得ている。

本章で出てくる、宗重正、田中光顕は鶯丸を所持していた人物で、今村長賀、別役成義は宮内省の御剣係を務めていた人物であり、皆明治を代表する鑑刀眼の持ち主である。また、四人とも明治33年に廃刀令以降衰退する刀剣界を憂いて保護と復興を目的として立ち上げられた「刀剣会」の発起人である[36]。

4・1　明治21年11月遊就館展示に際し

明治中頃より、春秋の靖国神社例祭に合わせて、靖国神社境内にある遊就館において刀剣の展示が行われていた。特に、明治19年に今村長賀が館長に就任してから、精力的に旧大名の秘蔵の刀剣なども旧大名家からの出陳により展示されている。[12] 鶯丸もその中の一振で、当時の小笠原家の当主長育より出陳されている[3]。

[12] まず明治19年には紀州徳川家より江雪左文字、黒田家よりへし切長谷部が出陳されている[37]

この明治21年の展示に先立ち、鶯丸の記事が東京朝日に掲載されている[38]。この時点で、鶯丸は友成作で最も出来が良い作と称されている。これを語ったのは誰か？　鶯丸を含め「友成」を何振も見た事のある者にしか、表現できない。明治維新からそう遠くないその時代、そのような機会のあった者とは？　長賀もしくはその周りのものではないだろうか？（しかもこれは一般公開される前の記事）また、遊就館の一般公開前に、わざわざこのような煽りの記事が出るのは珍しい。因みにこの時、後の鶯丸所持者となる田中光顕も一文字助宗を出陳している[3]。（明治28年に明治天皇に献上の助宗か？　）

「明治21年11月2日　東京朝日新聞」[38]より

「宝剣鶯丸」

（略）友成の作よりも最も見事の出来なるがごとく 光芒陸離一見人をして寒からしむるものなるを今度靖国神社境内なる遊就館より 出品して来る六日の大祭より諸人の縦覧を許すよし

（光芒:光の穂先 陸離:光の分散するさま）

4・2　明治32年2月今村長賀友成真作と評す

今村長賀が明治31～36年に遊就館において刀剣講話を行っており、その中の一回が古備前をテーマにしている。当然今村は鶯丸を直接見ている。名工たる友成の特徴を述べた後、友成真作の筆頭に鶯丸を挙げている。これは今村からも鶯丸の評価が高かったと思ってよいだろう。この今村長賀は明治刀剣界の三傑に数えら

れる[41] 重鎮or重鎮の刀剣鑑定家である。また、今村は瑕にはうるさい人物であったようだ[48]。

「刀剣講話4」[39]より

明治三十二年二月五日於遊就館　今村長賀君述

友成作太刀の姿は、備前物の掟通り、矢張りもと反りではあるが、其反り格好、肉置、中心の仕立とも格別品好く、地金は板目肌細かに美しく、刃取は少し湾心の如く高低があって、それに丁子乱れの足を焼き入れて、小沸匂の至って深く、出来により一寸見は直刃の如く見えるものもあるけれども能く透かして眺めれば、刃の中は賑々しく。乱れの足入になって其筈ながら中々眺めの深いものである。先ず友成で確かなものは、越前勝山藩小笠原家に、足利義教将軍より 拝領した感状付の 鶯丸と云ふ太刀があつた。是は生中心で太刀銘に備前国友成と 長銘に切ってある。 只今故あつて同家にはなく、他へ出て居る。（以下、他の友成について語っている。）

4・3　明治32年宗重正鶯丸を遂に入手す

明治32年7月の新聞記事に宗重正が鶯丸を入手したことが書かれている。詳細な入手日時はわからないが、「此程」という表現がなされている。前述の今村の明治32年2月刀剣講話において「小笠原にはない」と語っているが、このときの所持者は宗重正なのか、その前の持ち主なのかはわからない。この記事において、宗重正は小笠原家より出てから行方不明となっていた鶯丸をほうぼう手を尽くして探し出し、交渉の末遂に入手したと書かれる。宗重正は、対馬藩最後の藩主で、自邸に鍛冶場と刀工を抱えているほどの熱心な愛刀家であった[41]。有栖川宮家に刀剣鑑定で呼ばれていた記録も残る[43]。鶯丸はその宗重正が強く求めた太刀なのである。今村長賀とは刀剣仲間で、もしかしたら鶯丸を遊就館の展示で見ていたということもあるかもしれない。（第二版注：翌年の鶯丸の遊就館展示時には宗重正は武具を出陳していたためここでは確実に鶯丸を見ていると思われる。）宗重正は小烏丸を明治維新後に入手し、明治15年に献上した人物でもある[2][44]。（鶯丸と小烏丸は宗家ではオーバーラップはない。）

「明治32年7月5日読売新聞」より

「足利義教の刀　鶯丸」

越前某地の旧藩主某子爵重代の寶刀に鶯丸と呼ぶがあり能登守教経の佩刀を鍛たる備前友成の作にて長二尺四寸、足利将軍義教の蔵する所なりしが義教故ありて之を 某家の遠祖に與へ自筆の感状を添へければ同家に於て上なき寶物として永く子孫に伝へ先年同家より粟田口久國の太刀他二口と共に 遊就館へ出陳せしこともあり然るに同家改革の際此四品は去る人の手に流れて 久しく踪跡を知る能はざりしが旧対州候宗子爵は刀剣の鑑識に富みて（略）鶯丸の行衛に就ても大に苦慮する 所ありしに先比鹿児島県人重野某氏其所在を知るよし風聞せしかば子爵は伝を求めて某氏を尋ね出し種々 交渉の末此程遂に夫の鶯丸を買い取りたる由

4・4　明治38年3月以前別役成義鶯丸を賞す

明治41から42年に東京日日新聞紙上において連載されていた高瀬羽皐による「刀剣談」（後に同名の書籍にまとめられる）において、別役成義が友成中で鶯丸が最も優れた出来と語っていた、と書いている。別役は明治38年3月に没しているため、献上前の評価であり、田中光顕が入手する前でもある。別役がいつ頃羽皐にこれを語ったか、鶯丸をいつ見たのかは定かでないが、別役もまた刀剣会の発起人で、御剣係のため宗重正、今村長賀らと交友関係があり明治21、22年遊就館もしくは、明治32年以降宗家において鶯丸を見ていたのであろう。羽皐も刀剣会のメンバーであったが、彼らより大分年若で直接鶯丸を見る機会はなかったのかもしれない。（羽皐は発起人ではない。）

「明治42年東京日日新聞」[8]より

「続刀剣談（21）」　羽皐

友成は古備前の名作なれど、他の刀に比して存して居る物が多い。別役君の話に友成中で優れた出来で然して正しい物は鶯丸友成で有ろうと言われた。此刀は越前勝山の城主小笠原家の先祖が足利家より戦功に依って賜った物で、その時の感状が付いている。生忠で太刀銘にて「備前国友成」と長銘に切ってある。維新後故あって宗伯爵家に渡って同家の重器であったが、三年程前に田中光顕伯が買い取って之を献上した。

「刀剣談」[42]より

別役少将の話に鶯丸は生忠で備前国友成と五字銘がある、友成中尤も優れた出来であるということである。

4・5　明治39年田中光顕鶯丸入手する

田中光顕は、鶯丸を宗重正没後にその息子の重望から明治39年に鶯丸を買い取っている。晩年のインタビューにおいてその時のことを「名刀を得た」という表現をしている。鶯丸を「名刀」と称し、わざわざ鶯丸を買い取っていることから、高く評価していたことは確かであろう。田中光顕の鶯丸に対する評価に関しては、次章において、彼の『名刀とは』の持論とからめ詳しく議論する。

4・6　献上前評価まとめ

鶯丸の所持者であった宗重正、田中光顕のみならず明治の刀剣界の重鎮であった今村長賀や別役成義も鶯丸を高く評価していた。

一方で、彼らは「刀剣会」という同じ派閥であるため価値観が似ていたということはあるかもしれない。

5　田中光顕の刀剣に対するスタンス

田中光顕は、土佐の下級武士の維新志士[13]から成り上がった政治家である。宮内大臣を11年の長きにわたって務めた人物で、宮中に於いて強い権勢をふるったと言われている。刀剣界においても重鎮であり、刀剣会の代表に推挙されるほどであったが宮内大臣という立場上断ったとされる[7]。また明治天皇が古備前を好んでおられたのも、田中光顕の影響もあったのではないか[47]ともいわれる人物である。

鶯丸はそんな田中光顕がプライドを掛けて献上した最高の太刀なのではないだろうか？

5・1　明治39年光顕「名刀」を得る

田中光顕は、刀剣仲間の宗重正が明治35年に没後、息子の宗重望が鶯丸を売りに出したときに購入している。これは献上の前年の明治39年のことである。（一年くらいの誤差はあるだろうが。）先述の通り、重正がほうぼう探しまわって手に入れた経緯と比べれば、比較的容易な入手方法ではある。光顕はこの時のことを、「名刀を得た」と表現している。当然、光顕は鶯丸を高く評価していたのだろう。欲を言えば、折角なのだからもう少し微に入り細を穿つように詳細に書き残してほしかったものだ。

「伯爵田中青山」[7]より
寶珠荘の座談（田中光顕との座談）

日露戦役後三十九年に[14]下総の結城で大演習があって結城が大本営になった。其の前年又僕が名刀を得た。それは備前の友成である。さきの大一文字の助宗[15]などよりずっと古いものぢゃ。それは大変な歴史がある。（略　結城合戦に関して）小笠原家で代々宝物にして居たが其の後それを売物に出した。それを伯爵の宗重望が持って居たが、それを売出したときに僕が買ったのぢゃ。今言ったような次第で其の刀が結城に大変関係があるから、之を大本営に持って行って献上した。

光顕は品格のある古雅なる作風の古刀を好んでいることは有名だったので、重望が手放す際に、もしかしたら光顕に直接話が行ったかもしれない。重望は、絵画関係への興味が深い人物だったが、刀剣界隈で名を見る事は無いため刀剣熱はそれほどではなかったのであろう。父親の興した刀剣会の理念から考えれば、宗家重代の太刀でなければ名刀は然るべき人に譲り伝えるべしと思ってもおかしくない。その時、父親の刀剣仲間というのは至極当然の帰結なのではないか？

---

13 元土佐勤王党隊士で、武市半平太に学び、陸援隊幹部を務めていたこともある。坂本龍馬暗殺の近江屋には事件発生後駆け付けた一人で、龍馬が刀（陸奥守吉行）で応戦したであろう跡を記録している[49]。昭和になってから反りのなくなったその龍馬最期の刀を見たことを記録に残している[7]。また龍馬が現在のような名声を残しているのは田中光顕の影響も大きいと言われている。

14 正しくは明治四十年

15 明治２８年に献上の助宗の話が本文において先述されている

5・2　光顕持論『名刀とは元帥の差料たる刀剣』

田中光顕は、『名刀とは将の将たる人の差料、即ち元帥的の差料たる刀剣』という持論があり、それを繰り返し多くの人に語っている。以下長いが是非読んで欲しい。これはまさに、鶯丸の姿なのではないか？

「伯爵田中青山」[7]

趣味の人田中青山伯　市島謙吉

伯の仰せられますに、一体此の刀剣と云ふものは、どうかと云ふと其の一番良いものは、何と云っても矢張り将の将たる人の差料でなければならぬ。即ち元帥的の人と云ふものは騎馬の人である。馬に乗って居る人の佩剣と云ふものは長くなければならぬ。長いと云ふと重くなる。重くなると取り扱いにくい。之を取り扱ひ易くすると云ふのには細身でなければならない。又割合に薄くならねばならぬ。細身であると云ふとどうにかすると折れやすい。折れないで細身で、軽くと云ふことになるとすこぶる鍛えがよくなければならぬ。そこで名工の作でなければ、将に将たる人の差料と云ふことはできない。（略）唯それだけではいかぬ。必ず元帥的の差料には品がよくなければいかぬ。すなわち焼きが非常によいとか、匂ひがよいとか、どこからどこまで上品でなくちゃならぬと云ふことが即ち刀剣の極致だと

さて、光顕は生涯二振の太刀を明治天皇に献上している。一振目は明治28年に宮内省の高官だった時、日清戦争により広島大本営で長らく指揮をとっていた明治天皇のストレス解消にと一文字助宗太刀を献上している[7][45]。これは現在東京国立博物館蔵で、平成30年に熱田神宮で軍刀拵えと共に展示されていた[46]。二振目が明治40年（1907）に献上した鶯丸である。上述の通り鶯丸に対し、『又僕が名刀を得た』と光顕は語っている。鶯丸は、明治40年の陸軍大演習が結城で行われることや、この大演習は日露戦争（明治37、38年）の祝勝の意を表したことから、結城に縁があり、また勝ちと鶯丸が伝わった勝山を掛けて、献上した[50]。鶯丸の献上は、来歴の語呂がよかったからだけであろうか？　光顕は、太刀を献上する必要の全くない人物である。彼は宮内大臣であり、大演習の受け入れ地のホストではないため、行幸の際にホストからの献上のパターン（鶴丸など）はあてはまらない。明治天皇は熱心な愛刀家で古備前を好んでおり、光顕が鶯丸を献上する明治40年において、宮中には何百振もの太刀が方々からすでに献上されている。友成もすでに何振りも献上されているし、献上はされていないが現国宝厳島の友成もこの時期宮中に取り寄せされている[39]。光顕はすでに、助宗の太刀を献上している。

これらから、中途半端な太刀であれば献上する必要など全くない。光顕が大元帥たる明治天皇に一振り献上するとしたら名刀中の名刀を贈るのではないだろうか？

献上前に行ったとされる鶯丸のふくれの修復は、大包平の言葉を借りれば「より完璧になるというのか」の仕上げであったのではないか？

6　献上後の評価

現代における鶯丸の高い評価は、多くの書籍などで目にすることができる。ここでは代表的な二つをとりあげる。

6・1　昭和初頭の鶯丸鑑識書

鶯丸を室町時代から明治中頃まで所持していた小笠原家が江戸時代治めていた勝山の郷土史「勝山藩古事記」[51]に鶯丸の鑑識書が載っている。これは筆者が「勝山藩古事記」を編集中、鶯丸について宮内省に問い合わせたとき特別に書かれたもの。これを書いた小山田繁蔵は、ここでは御用係と表記されているが、いわゆる御剣係である。ここでは疲れはあるが申し分のなき出来栄えである、と評している。

「勝山藩古事記」[51]より

「名剣鶯丸鑑識書」

鶯丸は備前の巨匠友成の作で鎬造身長二尺六寸九分、刀身に多少の疲れを見るも姿厳かに位高く鍛といへ、刃文といへ申分のなき出来栄えである。

昭和五年十二月四日

宮内省御用係海軍中将　小山田繁蔵

6・2　平成において小笠原信夫鶯丸を賞す

現代における書籍では、しばしば鶯丸は現国宝の備前国友成造（東京国立博物館蔵）と並んで友成の傑作と称されている。その中でも、小笠原信夫の書籍ではしばしば鶯丸が紹介されており、またその表現も美しい。御物となっているため、市井に出てくる機会の少ない鶯丸であるが、1997年に「日本のかたな・鉄のわざと武のこころ」において出陳されており、小笠原信夫は、東京国立博物館においてそれを主催した人物である。信夫は鶯丸を友成の傑作のみならず、「古刀名刀中の白眉」であると称賛している。

「御物　皇室の至宝4」[2]ヨリ

作風はきれいな地鉄に地沸がつき、はっきりとした乱映りがたち、小乱れの強い丁子刃がのたれ調となり砂流かかる刃文となる。先の国宝より更に健全である。友成が正恒が直刃に小丁子小足の入った刃文であるのに比較して、一段と小乱刃の目立つものであるが、鶯丸はさらに小乱刃が目立ち力強い作風に特色がある。古刀名刀中の白眉である。（先の国宝＝東博蔵の備前国友成造）

余談であるが、信夫は鶯丸の伝来した小笠原家とはルーツを同じくする高天神小笠原の後裔である[53]（図1参照）。

6・3　献上後の評価まとめ

献上後の評価は総じて高く、これら以外でもさまざまな文献において友成の傑作であるとしている。

上記した資料では一方では研疲れていると書かれ、他方では健全と書かれている。私自身明確な定義を理解しているわけではないので不正確かもしれないが、疲れは、刀が研ぎ減っていることで、反対に健全は研ぎ減っていないことを示す用語である。刀身の状態において、疲れているか健全かは連続状態にあるものなのでここらへんは受け取る側の感性なのだろうか？　また、研ぎ減りがあること＝欠点なのではなく研がれることで出る味もある（三日月宗近）。名刀が長い年月を経て健全のまま残っていることもまたやはり尊いことである（大包平）。

7　フクレについて

本章ではフクレに関する概要と、鶯丸とフクレに関する記録、また鶯丸を研いだとされる研師の情報を載せる。

7・1　刀剣のフクレにたいする評価

フクレ＝致命的な疵というイメージを持っていないだろうか？鶯丸がフクレにより"身を崩していたかどうか"を想像する前に、まず、我々は『フクレ』がどのように認識されていたのかを理解しなければならない。いくつか、戦前くらいにおいて刀の瑕について書かれた書籍の表現をあげるが、どちらも「多少のフクレは大きな問題とするべきでない」としている。

「日本刀大観　上巻」[54]ヨリ

「刀身の疵と欠点」

刀身には色々の疵やら欠点がある。之れには鍛え上げた最初からあるものと後世に至って使用上の不注意とか度々研にかかった結果疵となり欠点となったものと、特別な痕跡から来たものとある。

ふくれ

表面の何所かにプックリと丸くふくれて現れるもので其の大きさは一分位[16]が普通である、このフクレは研に数回かかると破れて穴があいて仕舞う、これをフクレ破れと云ふ。

埋鐵

フクレ破れ又は地の疵を補う爲になるべく同性質の鐵で埋めたものである。巧に施して全く疵の見えなくなって居るものもある。

（他、刃切れ、しなへ、刃からみ、烏口、月の輪、菖蒲折、肌割れ、地荒れ、いしけ、匂切れ、焼切れ、刃染み、水影、焼落し、継中心の説明）

これらは瑕と称すべきものであるが、刃切れ、しなへを除く他は余り其の程度に依って懸念すべきものではなく大概の場合許すべきものである。

（図2参照）

「日本刀の位列と価格：鑑定備考」より

「刀の瑕の事」

刀剣の疵に鍛え割れ、月の輪、棟シナへ、棟割れ、刃シナへ、フクレ、シミ、鳥の口、カラスロ、刃切れ、立割れ、刃ガラミ、地アレ、スミコスリ等あり、されど中に就きて左程に害をなさぬ疵もあるなり、鳥の口、表裏に通れるは悪し鳥口、月輪など小ならば害なし、シナへも研ぎて抜ぬは悪し、刃切れは古来宜しからずと云えど切味には大した障害あらずと云ふ、立割れは少々は許すべし、最も嫌うは匂ひ切れなり、其他フクレ、スミゴモリ等は切味に害なしとして少々位は許すべきなり、地アレは古刀には致し

16 一分＝3 mm

方なしとするも新刀に於ては許べき瑕にあらず。

上述の通り、切味に障害とならないくらいの疵は「少しくらいは許すべきである」とあえて書かれているということは、小さな疵も問題とする風潮があったことを示している。明治時代に多少の疵により全体の価値を貶める風潮を改めようという機運があった、というのをどこかで読んだ気がする。（申し訳ないが、その時は流し読みしていてどこに書かれていたか忘れてしまった。）少し時代は下るが、昭和の名研師永山光幹（山伏国広、太鼓鐘貞宗を研いだ人）の言葉が残っている。

「日本刀職人職談」[56] ヨリ

「研ぎ」永山光幹

いかに優れた刀であっても一つの欠点のためにその刀の美術的価値が皆無であるかのように見なされてしまうきらいが、今日ではややもするとあります。そこでその刀を生き返らせる目的でのみ補修は行われなければならないと思います。

たった一つの欠点でその価値を無にする風潮はいかがなものか、と嘆いている。この言葉はフクレ＝致命的な疵と解釈しがちな我々には耳の痛いものである。

「まあ、細かいことは気にするな」

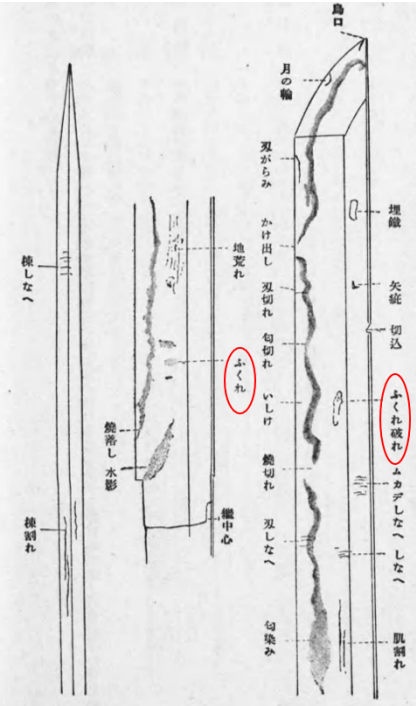

図2：刀身の疵［日本刀大観・上巻］[54] より

7・2　フクレ (blister) のメカニズム

本節はちょっと付け焼き刃的に調べたことで、うまく整理できていなく正確さに欠ける内容となっていてグダグダとしているがご了承いただきたい。

果たしてフクレというのはなんぞ。

刀剣書を読んでみてもそのメカニズムに関して、しっくりくるものがなかったので現代工学の知見をお借りする。フクレ (blister) というのは、主に（A）塗装、（B）鋳物で使用されている用語のようだ。（A）においては、塗膜（錆止めのペンキなど）と金属下地の間に異物が閉じ込められてしまった場合、塗膜の形成後に異物が原因で錆の発生やガスの発生により塗膜が下地から浮き上がること。（ペンキをきれいに塗ったあと、『しばらくして』プツプツとしたものが浮き上がってくること。）（B）は、溶かした金属を金型に流し込み固めるダイカスト法で作られた金属材料で起こる現象で、流し込むときに巻き込まれた空気が空洞や穴を形成することを言い、表層に近いところであればフクレ (blister) となる。また、再加熱により中に残った空気が膨張することでフクレ (blister) が発生する。刀剣の場合、製作過程において鉄を溶かさないので（B）のようなプロセスでのフクレ (blister) は発生しない。（A）のメカニズムが近いのであろう。

さて、（A）的なフクレ (blister) を刀剣の場合で考えてみる。塗膜ではないが、刀剣は繰り返し鍛錬による多層構造を持って居る。層の間に水分が残ると、それが原因で内部で錆が進みフクレとなる。これは、ものすごく大雑把にいうと、錆とは酸化鉄ではあるが鉄 (Fe) が空気中の酸素 (O_2) と直接反応するのではなく、水分 (H_2O) を媒介してイオン化うにゃうにゃで反応がすすむため、水分が多いと錆が進行する。だから刀剣保護には乾燥が重要！

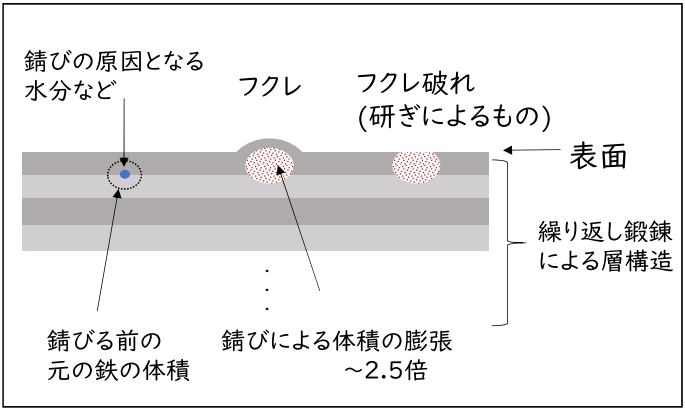

図3：内部の錆によるふくれの模式図

中で錆びると何故フクレとなるか？　というと鉄は錆ることにより元の体積の約 2.5 倍程度に膨らむためである。それにより、

錆びた部分により押し出され、表面がポッコリと浮き上がる（図3参照）。

これとは別の現象として、層の間に空気が残って表面が膨れていることがフクレと言うといったニュアンスで書かれている書籍もあるが、科学的変化が起きなければ気体の体積は変わらない（正確に言えば気体は温度変化により体積が変化するが、熱せられている時の方が体積が大きい）ので、この場合はうったばかりの刀身に元々現れているものであろう。又は研ぎにより、空洞まで到達。ただし、これはフクレとは言わないと指摘されていることもある[57]。（単純な空孔はやはり現代工学におけるフクレ（blister）の定義には含まれないだろう。）

しかし、本稿のテーマにとって重要なのは「明治時代の研師が『フクレ』と言い表していた現象」なのだが、結局のところ、鶯丸のフクレとはどのようなものであったか？ は、もはや誰もわからないのかもしれない。

7・3 鶯丸とふくれ

鶯丸に献上前にふくれがあり、フクレ直しの名人高田庄左衛門によって修復されたという記録は、「刀剣と歴史（417）」[59]に宮内省の研師の吉川恒次郎氏が鶯丸が献上された時の宮内省の研師から聞いた話として載っている。これ以外独立の記録は見当たらないが、証言としては筋の良いものであろう。

「刀剣と歴史（417）」[59] ヨリ

「研師の回顧」　鶯丸友成は献上前には多くの刃ぶくれがありましたが、高田庄左衛門さんがきれいにふくれをおさめて研ぎ上げ、献上しております。当時の宮内省の研師、井上行造さんから聞いた話ですが、研ぐ前に押形をとり、ふくれの部分に印をつけておいたが、研ぎたての友成と押形をみくらべても少しも判らなかったそうです。宮内省では次の研師に鶯丸に手を付けるな、というのが申し伝えになっているほどです。（略）高田さんは疵なおしの名人で、このほか数多くの古名刀が同氏の手により蘇生しています。

この文章だけ読むと、キズモノであった鶯丸が高田庄左衛門によって蘇生したという印象を持ってしまうのも頷ける。一方で4、5章で議論した通り、ふくれが刀身にあったであろう献上前でも非常に評価が高かったということも事実である。名刀であるがゆえに、オーバーに伝えられているということだろうか？ 十人並みの容姿であればそこまで存在が気にならない小さなにきびも、美人の顔に出来て居るとむちゃくちゃ気になってしまう・・・ような。だがしかし、『美人は美人』ということだろうか。

7・4　高田庄左衛門について

高田庄左衛門という研師はフクレ直しで有名であったようである。そのフクレ直しの技量は宮内省の研師であった井上行造も一目置いていた存在のようだが、変人のようでもあったようだ。よくぞ鶯丸の修復を請け負ってくれたものである。

「日本刀ー本質美に基づく研究」[58]より

高田庄左衛門という人は、フクレ直しの特技で有名だったという話を先師[17]から何度か聞かされておる。井上行造師が是非その方法を教えてもらいたいと申し込んだところ、弟子になるなら教えてやろうとの返事で、行造師も非常に困り、種々手を尽くしたが結局弟子入りもせず秘法も伝わらなかったという。非常に奇行の多かった人物で、晩年は昼も戸をしめて気に入らぬ人には逢わなかったというような話もあるが、この人の本当の力量についてはわからない。

17 研師である筆者（山田英）の師杉本次郎のことと思われる

8　まとめ

嘉吉元年五月二十六日、第六代足利将軍義教から結城合戦褒賞として鶯太刀友成（鶯丸）と感状が信濃守護小笠原政康に与えられた。信濃の英傑政康の死後、一族による家督争い、その後の戦乱の中、命脈を繋げた小笠原家は鶯丸をレガリアとして大事に守ってきた。明治維新の後、武家の象徴としての役割はなくなるもしばらく小笠原に重宝として留まるが、時代の流れに逆らえず明治中頃小笠原より離れる。その後鶯丸は明治時代の刀剣界の重鎮らに高く評価されそして強く求められながらその所在をてんてんとした。ついに、明治40年に明治天皇に献上され現在に至る。献上前にフクレの修復を行った記録が残るが、鶯丸は献上前も献上後も変わらず名刀工友成の傑作と称されている。

附録・簡易年表（未完成 version）

注記がない場合は松尾＝勝山小笠原をさす

987 友成は永延（987–989）の頃の刀工とも伝わる
一条天皇の御代 藤原道長活躍の時代
1130 源義光孫清光が甲斐に配流され甲斐源氏興る
1184 清光孫長清が小笠原を称する（吾妻鏡）
1185 壇ノ浦の戦いにより平家滅亡
1192 源頼朝 征夷大将軍宣下
1333 鎌倉幕府滅亡
後醍醐天皇による建武政権発足
1336 建武政権崩壊 南北朝時代始まる
事実上の室町幕府成立
1338 足利尊氏 征夷大将軍宣下
1392 南北朝時代終わる
1400 信濃大搭合戦 小笠原長秀信濃国人に大敗
1405 小笠原政康 兄長秀より家督を継ぐ
1425 小笠原政康 信濃守護に補任
1428 足利義教後継者に指名され還俗
1429 足利義教将軍宣下（室町第六代将軍）
1436 政康 対抗する信濃勢力を次々破る
戦功の褒賞として久國、真長等を拝領
1439 永享の乱 鎌倉公方足利持氏自害
1440 持氏遺児を擁した結城合戦開始
政康副将として参陣
1441 結城合戦終結 義教より政康鶯丸拝領
嘉吉の変 足利義教暗殺
1442 小笠原政康死去
1446 漆田原の戦いで宗康討死
1467 応仁の乱はじまる 松尾西軍 府中東軍
1478 応仁の乱 終息
1493 松尾が惣領家の鈴岡を攻め政秀父子を討つ
1534 府中が松尾を攻撃 松尾家甲斐に逐電
府中による小笠原の統一とされる
1554 武田の支援をうけ松尾に復帰
1573 足利義昭京都追放事実上の室町幕府終焉
1582 織田の甲州征伐により信嶺織田に臣従
本能寺の変
信嶺徳川に臣従
1590 小田原征伐 信嶺出陣
小笠原本庄に移封（1 万石）
1600 関ケ原の戦い（小笠原は上田城攻め）
1603 徳川家康征夷大将軍宣下
1612 小笠原 古河藩に転封（2 万石）
1614 大坂夏の陣 政信参陣 佐和山城守備
1615 大坂冬の陣 政信参陣 伏見城守護
1619 小笠原 関宿藩に転封（2.2777 万石）
1640 小笠原 高須藩に転封（2.2777 万石）
1643 寛永諸家系図伝完成
1657 明暦の大火 江戸上屋敷延焼（日本橋）
1671 小笠原 勝山藩に転封（2.2777 万石）
1719 享保名物帳完成
1736 鶯丸、久國、眞長太刀感状と共に吉宗に台覧

1812 寛政重修家譜完成
1855 安政江戸大地震　江戸上屋敷倒壊（大名小路）
1867 大政奉還
1868 戊辰戦争 長守 新政府に協力
1871 廃藩置県 長守藩知事免官
　小笠原 東京に移住
1876 廃刀令
1888 靖国神社遊就館にて鶯丸一般公開
1889 靖国神社遊就館にて鶯丸一般公開
1891 最後の勝山藩主小笠原長守没
　1889〜1893 の間に鶯丸小笠原を離れる
1893 小笠原文書　長育により再装丁
1895 小笠原長育没
1899 宗重正鶯丸を入手
1900 田中光顕、宗重正らにより刀剣会発足
1902 宗重正没
1906 宗重望より田中光顕　鶯丸を購入
1907 陸軍結城大演習にて鶯丸明治天皇に献上
1909 田中光顕失脚　宮内大臣罷免
1912 明治天皇崩御 大正天皇即位
1926 大正天皇崩御 昭和天皇即位
1989 昭和天皇崩御 明仁天皇即位（元号平成に）
1997 東京国立博物館「日本のかたな」に鶯丸出陳
2019 明仁天皇の譲位 今上天皇即位（元号令和に）

参考文献

[1] 勝山小笠原文書, 新編信濃史料叢書, 第 12 巻所収。
[2] 御物 皇室の至宝 4, 宮内庁協力, 毎日新聞社,1991。
[3] 読売新聞, 毎日新聞, 東京日日新聞, 明治 21 年 11 月 6 日。
読売新聞明治 22 年 11 月 26、27 日別刷。本稿を書いたのちに、明治 22 年 11 月の展示の記録が発見された。
[4] 影写本小笠原文書,　解説, 東京大学史料編纂所編纂, 2008.
[5] 小笠原古文書写, 明治 31 年平井淳麿謄写.
[6] 読売新聞, 明治 32 年 7 月 5 日.
[7] ☆伯爵田中青山, 田中伯伝記刊行会編, 昭和 4 年
[8] 東京日日新聞, 明治 42 年 8 月 21 日
[9] 鶯丸明治期来歴まとめ
http://wagtail.chagasi.com/meiji.html
[10] 中世関東武士の研究 第 18 巻, 信濃小笠原氏, 花岡康隆, 2015.
[11] 松本市史 上巻, 昭和 8.
[12] 下伊那史, 第 6 巻, 1970.
[13] 満済准后日記, [14] 内での当該引用を参照.
[14] 中世武家社会の研究, 河合正治, 吉川弘文館, 1985.
[15] 鶯丸の史料における名前の書かれかたまとめ
http://wagtail.chagasi.com/kiminona.html
[16] ★後鑑（義教.義政), 国史大系 7 所収
[17] ☆勝山小笠原家譜, 信濃史料叢書　下巻（貞信まで収録)
[18] 寛永諸家系図伝, 清和源氏　辛一, 寛永諸家系図伝 4 巻（小倉小笠原の家譜)
[19] 寛永諸家系図伝, 清和源氏　辛二, 寛永諸家系図伝 4 巻（勝山小笠原の家譜)
[20] ☆松尾小笠原の大略, 勝山市史資料篇 1 所収
[21] 菱実紀聞, 西門蘭渓, 天保.安政（福井大学図書館所蔵)

[22] 福井大学附属図書館, 福井大学附属図書館報
[23] 図書館 forum, 2013.03, no.10
鶯太刀祭りについて-文献からみるその伝承
http://wagtail.chagasi.com/ ugu_fes2019/index.html
[24] 笠系大成, 新編信濃史料叢書. 第 12 巻所収
[25] ☆寛政重修家譜第百八十八（小倉小笠原家の家譜）新訂寛政重修諸家譜. 第 3 所収, 続群書類従完成会, 1964
[26] 豊前豊津小笠原家譜, 信濃史料[27]に所収箇所を参考にした
[27] 信濃史料, https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/2000710100/topg/shuroku.html
[28] 御当家未書, 福岡県史近世史料篇所収
[29] 溝口家記, 信濃史料[27]に所収箇所を参考にした.
[30] ☆勝山小笠原家譜, 勝山市史資料篇 1(貞信から長守まで収録)
[31] 特別展京のかたな匠のわざと雅のこころ, 京都国立博物館, 2018
[32] 「享保名物帳」の意義と八代将軍徳川吉宗による刀剣調査, 川見典久, 古文化研究 : 黒川古文化研究所紀要 (15), 31-90, 図巻頭 4p, 2016, 黒川古文化研究所 http://www.kurokawa-institute.or.jp/pdf/15kawami.pdf
[33] ☆森文書御用留, 勝山市史資料篇 1 所収
[34] ☆寛政重修家譜第百九十五（勝山小笠原家の家譜）, 新訂寛政重修諸家譜. 第 4 所収, 続群書類従完成会, 1964
[35] ★有徳院殿御實紀附録巻七, 徳川実紀第六巻,（国史大系十四巻所収）
[36] 中央刀剣会 HP
http://chuo-toukenkai.org/history
[37] 読売新聞, 明治 19 年 5 月 6 日
[38] 東京朝日新聞, 明治 21 年 11 月 3 日
[39] ★刀剣講話 4、今村長賀・別役成義, 明治 31-36 遊就館における談話録
[40] ★剣話録（下）, 今村長賀・別役成義,（[39]を活字化）
[41] 刀剣人物史, 辻本直男, 刀剣春秋/宮帯出版社, 2012.9
[42] ★刀剣談, 羽皐隠史（高瀬羽皐）, 日報社, 明治 43.
[43] 熾仁親王日記 4, 高松宮家, 昭和 11.
[44] 明治天皇紀, 第 5 巻（明 13–15）, 吉川弘文館
[45] 明治天皇紀, 第 8 巻（明 25–28）, 吉川弘文館
[46] 目録 明治の光輝〜明治 150 年記念展〜, 熱田神宮, 2018.
[47] ☆明治天皇の御愛刀と神宮の神寶, 大日本刀剣史. 下巻, 原田道寛春秋社, 昭和 16.
[48] 復刻叢書日本刀価値考, 光芸出版, 平成 15 年.
[49] ★維新風雲回顧禄, 田中光顕, 昭和 3.
[50] ★「名刀の如き田中伯」春城漫筆, 市島謙吉, 早稲田大学出版部, 昭和 4.
[51] ☆勝山藩古事記, 安田仁一郎, 勝山藩古事記協賛会, 昭和 6.
[52] 日本のかたな:鉄のわざ武のこころ:特別展目録, 東京国立博物館, 1997.
[53] 日本刀の鑑賞基礎知識, 小笠原信夫
初版: 至文堂 2000 年, 復刻版 2019, 雄山閣.
[54] ★日本刀大観, 本阿弥光遜, 日本刀研究会, 昭和 17
[55] ★日本刀の位列と価格 : 鑑定備考, 高瀬梧堂 編, 嵩山房大正 8
[56] 日本刀職人職談, 大野正, 光芸出版, 昭和 46 年.
[57] 「目で観る刀の教科書展」, 日本刀剣博物技術研究財団, 2019, 5, 宮城県大崎市スコーレハウス
[58] 日本刀-本質美にもとづく研究, 山田英, 中央刀剣会, 昭和 39 年 12 月
[59] ☆研師の回顧, 吉川恒次郎, 刀剣と歴史 417 号,
日本刀剣保存会, 1964.1

国会図書館デジタルコレクションでオンラインで読めるものには★図書館送信サービスで読めるものには☆を付けた。本文中において引用した

図は著作権保護期間終了のものである。
明治時代の新聞記事は、図書館で契約の各新聞のオンラインのアーカイブサービスを利用した。東京日日新聞は毎日新聞系のアーカイブ（毎索）で閲覧可能。

編集注

鶯丸は、室町時代に於いて鶯太刀、江戸時代において鶯太刀・鶯・鶯丸等の呼び名をされているが本稿においてはそれぞれの時代における説明においても鶯丸で統一して表記した。
本稿は鶯丸の評価に焦点をあてているので今回掲載しきれなかった小ネタ等は
http://wagtail.chagasi.com/index.htm
に集めてあるので参照していただきたい。
本稿ではあまり触れなかった小笠原の家督争いはレガリアの争奪戦をしていたりと興味深いところもあるのだが、複雑すぎてまだ咀嚼できていない。いつか、それをテーマにまとめられたらと思っている。

あとがき

鶯丸の来歴を調べ始めたとき、「小笠原文書」が目的で居住県内の某大学図書館に初めて足を踏み入れた。そこに、たまたま「伯爵田中青山」が蔵書されていたので手に取って田中光顕の刀剣に対する情熱とスタンスを知り、鶯丸は献上前も名刀であったのだと思うようになった。一方で、フクレの修復を思わせる新規ボイスも追加され、ネット上に出回る情報は、献上前は身を崩していたという解釈が優勢であるように思えた。1000年頃にうたれてから歴史に残らない450年、小笠原家に入って450年、持ち主を転々とした20年、そしてこの100年、ずっと大切にされ、鶯丸は千年間ずっと美しかったのだという解釈もあるのだということを伝えられたらと思っていた。
本稿ではあえて主観的なエモさを排除し、淡々と資料を羅列していて読みにくいかもしれないが、そこからの解釈、エモの引出しは各人に委ねたい。
いずれ鶯丸も修行にむかうのであろう。もしかしたら、フクレの修復の記憶と向き合うことがあるかもしれない。私自身の解釈としてふくれは大した疵ではなかったと考えているが、それは、それとして受け止めようと思う。だが、願わくば、どこで何をしてきたのか煙に巻くような修行であったり、岡山で大包平の観察を極めて来てくれないかなと思う。
鶯丸にはミステリアスでいて欲しいのだ。

著者　セキレイ
Twitter　@WagtailW
発行　令和元年五月二十六日
令和二年五月二十六日改訂

Website
月日星
このPDF取得可
http://wagtail.chagasi.com/index.htm
お題箱
感想ご質問など
https://odaibako.net/u/WagtailW

TOP → PDF 置場:この原稿の PDF file 取得可

無断転載・無断転用を禁止します

第一版→第二版改訂ポイント

この一年でそこそこ資料も増えましたが大きな改訂は行っていません。ただし、小笠原家としての最後の記録が明治21年11月から明治22年11月になった部分は変更しました。明治時代の来歴詳細に関しては、『鶯丸という現象～明治の記憶～』を参照してください。
http://wagtail.chagasi.com/MJ.html